

性教育の在り方について

—性教育の改善へ向けて—

梅木 彰子・木子 莉瑛・木原 信市・田尻 章子*・田中 美和**

Towards the Improvement of Sexual Education

Shoko UMEKI, Rie KIGO, Shinichi KIHARA, Akiko TAJIRI, Miwa TANAKA

(Received September 1, 1999)

To clarify what sex education should be, this research investigated sexual recognition by university students and sex education that they received in the past. As to their awareness of sex, many of them recognized the sex of human beings as an "instinct." Male students showed an especially high rate. Many students had the impression that sexual intercourse is "love." Here female students showed a high rate. As to premarital sex and virginity, their awareness was less prescriptive, and rather permissive, in favor of open and free sexual relations. Regarding the contents of sex education they received, they learnt much about physical and physiological aspects such as "secondary sexual characteristics" and "contraception," but did not much discuss so social aspects, such as their views on life, lifestyles and male-female relations. Because the students generally thought that home and school were the main places of education, sex education at home with their family seems to be to them as important as that in school.

Key words : sexual consciousness, sexual education, university student

I. はじめに

今や、テレビやマスメディアには性情報が溢れ、容易に性の知識を得ることができるため若者の性意識、性行動が開放的かつ活発化してきた。この背景には、西欧の民主主義体制である個人主義、自由主義といった要素に影響された部分が大いであろう。それに伴い、特に10代女性の人工妊娠中絶の増加、10代～20代男女のエイズや性行為感染症の増加など性を軽視した性行動による問題が顕在化しつつある¹⁾。

このような変化に対し、現代の若者の実態を把握するために青少年の性意識および性行動について全国規模で多様な視点から調査が行われており、その結果を概観することができる²⁾³⁾⁴⁾。こうした調査結果のなかには、性教育において記憶している内容は、多くの青少年が性の生理的側面に関することであるが、知りたがっているのは社会的・精神的側面である⁵⁾との意見が挙げられている。また、青少年の知識的側面は、過剰な情報が得られる反面、真に必要な情報や知識が不十分なことが指摘されている⁶⁾。わが国では、1965年以降、性解放の影響により性教育の視野が拡大されるようになってきたが、前述した性意識の報告をみる限り、実態に即した性教育の対応

* 長崎県立五島高校

** 福岡済生会病院

がなされているとは言い難い現状が窺える。

とりわけ、思春期は発育経過のなかで、心身ともに最も激しい変化を示し、性が現実の人間生活のなかで躍動し始める時期⁷⁾であり、この時期における性の課題が重要視される。思春期以降の性教育について、松本⁸⁾は「思春期のセクシュアリティのあり方を自分自身で考えさせ、自分の責任で性に関する意志決定ができるように導くべきである」と述べ、このような見解は性教育をすすめていくうえで重要な指針であると思われる。意志決定には、主に個人の価値観や性意識等の性に関連する知識が基盤となっている。このような観点から、青少年が性をどのようにとらえているのか、そしてどのような知識を習得しているのかについて把握する必要があると考えた。

そこで今回、性に対する意識がほぼ確立したと思われる大学生を対象とし、最近の性意識とこれまでに享受した性教育の実態を明らかにし、性教育のあり方を検討することを目的に研究を行った。

II. 研究方法

1. 調査対象

無作為に抽出した K 大学、および K 学園大学の大学生 180 名（男子 100 名、女子 80 名）

2. 調査期間

平成 9 年 10 月 6 日～10 月 24 日

3. 調査方法・調査内容

調査方法：質問紙法による留め置き調査（多肢選択法を主とし、一部自由記述式とした。）

調査内容：性意識、性教育について調査した。

(1) 性意識

1) 性の捉え方

①種族保存 ②本能 ③生きる証 ④男女の区別 ⑤愛情 ⑥なくてはならないもの ⑦たいせつなもの ⑧人間の本質 ⑨神秘 ⑩運命、生命の 10 項目を挙げ、調査した（複数回答可）。

2) 性行為の捉え方

①愛 ②寂しさ・孤独感を紛らわすもの ③欲求解消 ④快楽 ⑤生殖行為 ⑥生きる証 ⑦その他の 7 項目を挙げ、調査した。

3) 処女・童貞観

「結婚するまで処女・童貞でいたい」、「いたくない」、「こだわらない」の 3 項目に分類し、調査した。

4) 結婚相手の性体験の有無

結婚相手には、「性体験がある人がよい」、「結婚前提ならばよい」、「自分で責任がとればよい」、「妊娠しないように注意すればよい」の 4 項目に分類し、調査した。

5) 避妊・妊娠

避妊・妊娠において、避妊の主体は誰だと思いかで、「男性」、「女性」、「男女両方」の 3 つに分類した。また、本人もしくは相手の女性が妊娠したらどのように対処するかで「産む」、「中絶する」、「わからない」、「その他」の 4 つに分類し、調査した。

6) 家庭の影響を受けているか

家庭の影響を受けているかどうかについては、「大変受けている」、「どちらかといえば受けている」、「どちらともいえない」、「ほとんど受けていない」、「全く受けていない」の5項目について調査した。

(2) 性教育

1) これまでに受けた性教育について

①身体の清潔 ②男女の体の働きと構造 ③男女の心理や行動の違い ④男女交際 ⑤第二次性徴 ⑥避妊 ⑦受精・妊娠・出産 ⑧エイズなどの性病について ⑨生命尊重, 人間の生き方の9項目について「十分役に立った」、「多少役に立った」、「全く役に立たなかった」の3評価を設定し, 調査した(複数回答可)。

2) いつ性知識を得たか

①小学校 ②中学校 ③高校以上

3) 誰から性知識を得たか

①両親 ②兄 ③姉 ④上級生 ⑤同級生 ⑥教師 ⑦養護教諭 ⑧雑誌 ⑨保健の授業 ⑩テレビの10項目に分類し, 「妊娠・出産」「避妊・中絶」「性交」「性病(エイズも含む)」の4項目について, 誰から性知識を得たかを調査した。

4) 性教育が行われる場について

①家庭 ②学校 ③家庭と学校 ④必要ない ⑤わからない ⑥その他より選択後, さらに上記の性教育の内容がそれぞれどこで行われるのが適切かを調査した。

尚, 統計学的有意差検定は, χ^2 検定とフィッシャーの直接法で行い, 危険率5%以下を有意差があるとした。

III. 結果及び考察

1. 性意識について

(1) 「性の捉え方」

「人間にとって性とは何だと思うか」との問いについて, 「本能」58名(32.2%)が最も多く, 男女の内訳は, 男子44名(44.0%), 女子14名(17.5%)と男子の方が多く答え, 有意差がみられた($p < 0.05$)。次に「種族保存」27名(15.0%)で, 男性14名(14.0%), 女性13(16.3%)であっ

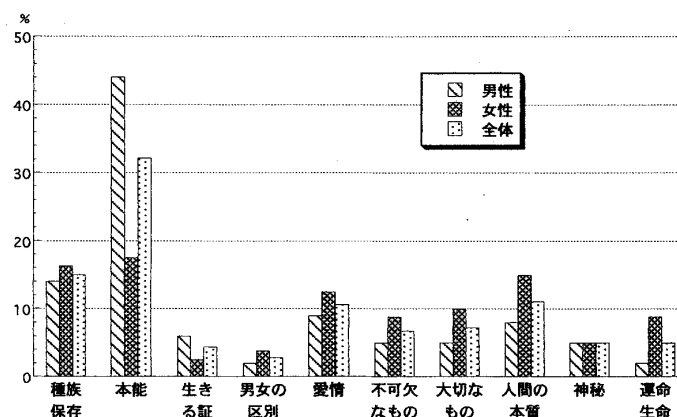


図1 性の捉え方

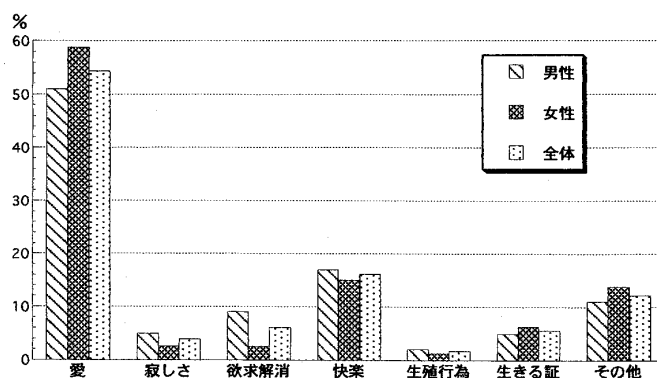


図2 性行為の捉え方

た(図1)。

一般に性とは解剖学的あるいは生殖、本能的な性的欲求等をさす概念として捉えられることが多いであろう。しかし、人間の性は、生物的な側面のみでなく、親密性をはぐくんだり、性役割などの心理・社会的側面を包括した幅広い意味も持つものである。つまり、性意識は、本能・生得的意識と後天的意識により形成され、特に後天的に獲得されるという点においては、性教育が関与していくことが大切であると考ええる。

(2)「性行為の捉え方」

「あなたにとって性行為とはどのようなものか」との問いに、「愛」98名(54.4%)と答えた者が最も多く、女子47名(58.8%)に高率であった(図2)。人間の性欲は、生理的・身体的な面と心理・精神的な側面の両者によってはじめて人間らしい性の充足を得ることができる。この心理的な充足とは、「自分が相手に受け入れられ、認められ、包み込まれている」感じであり、これを「承認・受容の欲求の充足」というが、そうしたものを求める心があり、それが満たされることも性行動の重要な目的といえる⁹⁾。女子が高率であったのは、「承認・受容の欲求」が男性より女性の方により強いことを示唆している。

男子に「欲求解消」9名(9.0%)と答えた者が女子2名(2.5%)より多かったのは、男女の性的な成熟を示す指標としての初潮・精通という性行動およびその現象がもたらす心理的な影響による違いが関与していると考えられる。特に男性の精通=射精経験が引き起こす快感は、性行動としてのマスターベーションに直結すると同時に、性関心、接触欲求、さらには性交欲求を目覚めさせる。また、男性ホルモンが性衝動の主役といわれるように、性的欲求は男性の方により強く具体的な形で現れる。さらに、性というものを快楽という一義的に捉えた性開放の風潮、および性を商品化したジャーナリズムなどの影響を強く受けているものが多いからではないかと思われる。

(3)処女・童貞観

処女・童貞観に対しては、自分自身に対して「処女・童貞にこだわらない」156名(86.7%)とする者が高率である「処女・童貞でいたい」とする者は、男子2名(2.0%)、女子5名(6.3%)、「処女・童貞でいたくない」とする者は、男子13名(13.0%)、女子4名(5.0%)であり、特に男子は「童貞でいたい」とする者よりも「童貞でいたくない」とする者が多い(図3)。このような実態は、処女崇拜の信仰が崩れてきたことや旧道徳観に基づく処女・童貞観が薄らいできていることを裏付けている。

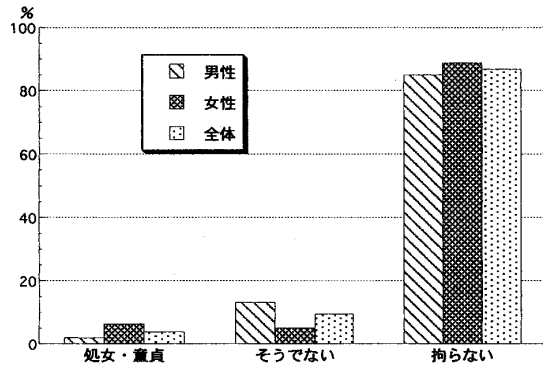


図3 処女・童貞観

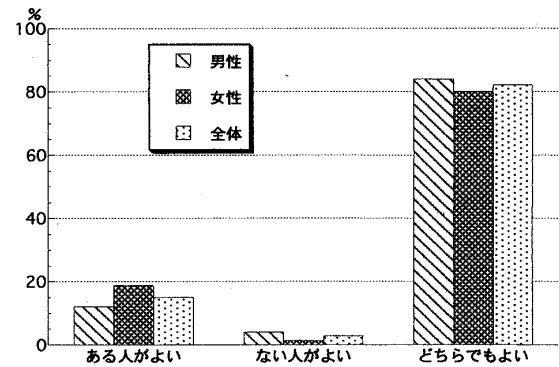


図4 結婚相手の性体験

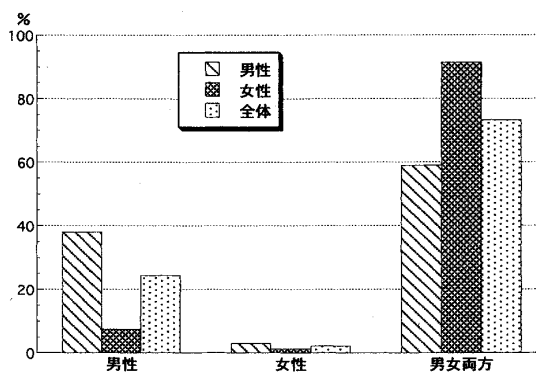


図5 避妊の主体性

最近、テレビやマスメディアによる性情報の氾濫、また若者の性意識が開放的になってきていることから性交経験の低年齢化が進んでいる。また、男女とも結婚までは肉体関係を避けるといった意識的抑制が低下してきている。こうした性意識の変化には男女平等意識、避妊知識や技術の普及化、マスコミの風潮、女性の独身志向等の事情が関係していると考えられる。

(4) 結婚相手の性体験の有無

結婚相手の性体験の有無については、「どちらでもよい」148名(82.2%)と答える者の割合が高かった。この結果から、多くの者が婚前交渉を認め、相手に対して処女・童貞のこだわりをもっていないといえる。次に、「性体験のある人がよい」とする者は男子12名(12.0%)、女子15名(18.8%)で、「性体験のない人がよい」とする者は男子4名(4.0%)、女子1名(1.3%)であり、男女とも「性体験のない人がよい」とする者よりも「性体験のある人がよい」とするの方が上回っている(図4)。このことは、性体験がないという事実は、若者の間では恥ずかしいこと、人に比べて遅れているとして受け取られる風潮が強いことなどが考えられる。また、婚前交渉を認める理由として「愛があればよい」、「自分で責任がとれればよい」が多く挙げられ、竹井¹⁰⁾の「婚前交渉の許容見解が増加している」と同様の結果が得られた。

(5) 避妊・妊娠

「避妊の主体は誰か」との問いに対しては、「男女両方」、「男性主体」、「女性主体」の順に多かった。性別との関係を見ると、「男女両方」と答えた者は男子59名(59.0%)、女子73名(91.3%)

と女子の方が多くみられているが、「男性主体」と答えた者は男子 38 名 (38.0%), 女子 6 名 (7.5%) で男子の方が多くみられている ($p < 0.01$) (図 5)。このことから、避妊はどちらか一方の問題ではなくお互いの責任で行われるべきであるという者が多いということが窺える。

「男女両方」と答えた理由には、「避妊を男性任せにするのはおかしい。女性も自分の体は自分で守らなければならないと思う。」、「二人の問題で二人の将来に関わることだから、子供が二人の間に生まれて幸せか、それを考えるのは一人では決められない」、「一般的に男性が主体だけ男性ばかりに避妊を任せていると女性が受け身になってしまい対等なつきあいにはならないので」、「性体験は男女の同意の元で行われるものだと思うから」、「男女平等の思想により責任は当然二人にある」、「お互いに自分のことも大切にしたい方がよいと思うから」などが挙げられている。こうした考えは男女平等意識や個人の権利主張という思想が強く表れているといえる。

「もし妊娠したらどう対処するか」との問いに対してはほぼ半数が「わからない」と答えており、次いで「中絶する」、「産む」の順に多かった。性別でみると「中絶する」は男子 13 名 (13.0%), 女子 27 名 (33.8%) で女子の方が多く、「産む」については男子 19 名 (19.0%), 女子 9 名 (11.3%) で男子の方が多かった ($p < 0.01$) (図 6)。「わからない」と回答したものが最も高い割合を示していることから、「自分で責任をとればよい」と婚前交渉を認めても、実際に妊娠したらどう対処すれば良いか判断できない或いは考えていない人が多く、性行為と妊娠が必ずしも結び付いているとは言い難い。また、女子が「中絶する」を多く選択したのは、男子より妊娠を切実に感じるため、「中絶する」を多く選択したと考えられる。しかし、生命倫理など重視されてきている今日、妊娠という性教育以前に、生命の尊重を授業の一環として教えていく必要があると思われる。

(6) 家庭の影響を受けているか

「自分の性に関する考え方は、家庭の影響を受けているか」との問いに対し、「ほとんど受けていない」と「全く受けていない」と答えた者は 81 名 (45.0%) であり、対象者は家族からの影響が低いと意識している傾向がみられる (図 7)。

近年の傾向としては、核家族や夫婦共稼ぎの普及、父親の家庭における権威失墜などにより、家庭の教育能力が低下しているといわれている。また、性教育に対し、その必要性を否定する親は減少しているが、親自らが強いタブー意識や性にまつわる羞恥心をもつが故に、家庭では性に関する話題を口にできないという現状がある。この現状を打開するために生徒に対する学校での性教育と並行して、家庭においても一人一人に対する個人に合った性教育を行っていく必要がある。

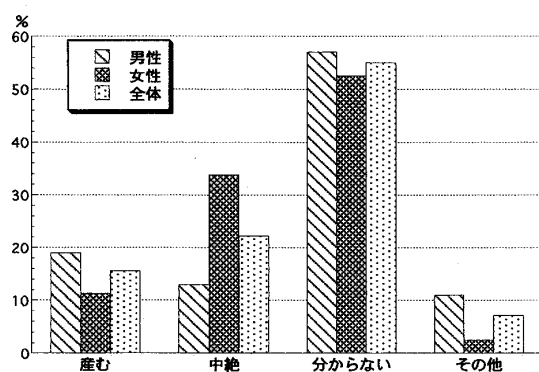


図 6 妊娠した場合の対処法

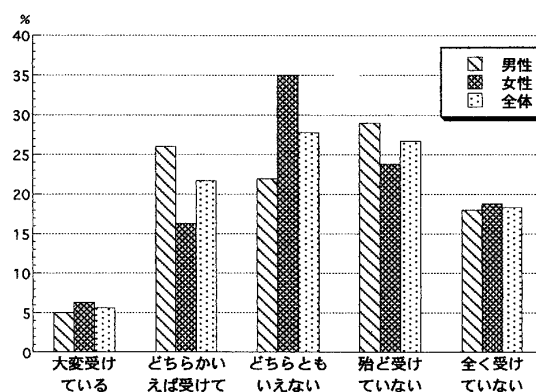


図 7 家庭からの影響

表1 これまで受けた性教育

項 目	身体 清潔	体の働き と構造	心理 行動	男女 交際	二次 性徴	避妊	生殖	性病に ついて	生き方
充分役に 立った	17 (9.4)	24 (13.3)	14 (7.8)	8 (4.4)	41 (22.8)	43 (23.9)	39 (21.7)	44 (24.4)	21 (11.7)
多少役に 立った	44 (24.4)	109 (60.5)	60 (33.3)	42 (23.3)	107 (59.4)	100 (55.5)	105 (58.3)	93 (51.7)	46 (25.5)
全く役に立 たなかった	3 (1.7)	12 (6.7)	19 (10.6)	16 (8.9)	14 (7.8)	6 (3.3)	8 (4.4)	10 (5.5)	8 (4.4)
その他	1 (0.6)	1 (0.6)	2 (1.1)	3 (1.7)	1 (0.6)	3 (1.7)	3 (1.7)	3 (1.7)	1 (0.6)
受けて いない	115 (63.9)	34 (18.9)	85 (47.2)	111 (61.7)	17 (9.4)	28 (15.6)	25 (13.9)	30 (16.7)	104 (57.8)

n=180 , (%)

と思われる。

2. 性教育

(1) これまでに受けた性教育

過去に受けた性教育の内容について半数以上の者が「十分役に立った」、「多少役に立った」と答えた項目として、「第二性徴」、「受精・妊娠・出産」、「避妊」、「エイズなど性病について」、「男女の体の働きと構造」がある。一方、受けていないとするなかで、半数以上を示す項目は「身体の清潔」、「男女交際」、「生命尊重・人間の生き方」であった（表1）。

対象者が享受した性教育については、対象者の多くが身体的・生理的側面を習得しているという傾向がみられた。新立¹¹⁾の報告では、過去に受けた性教育のなかで「性器のつくりと働き」、「初経」、「精通」、「二次性徴」、「性感染症（エイズを含む）」といった内容が高い割合を示している。即ち、生理的側面に関する部分が多く取り扱われているのではないと思われる。これと同時に、上記に示す内容は青年期における発達課題に関連する事項であることから、対象者が自分により身近なものとして強い関心がもたれるのではないかと考える。

一方、享受していない内容のなかで、「身体の清潔」については、教育現場において授業から教わったというよりも、養育過程のなかで身につけていくものと思われる。「生命尊重・人間の生き方」については、性教育でどこまで教えるかは教師によって異なり、性器教育までとするものから、人間教育として捉えるものと様々である¹²⁾。つまり、教師側の性に対する認識が多様であるためこの項目が取り上げられていないと推測する。性とは生きることといわれるが、思春期の性意識の形成過程には林¹³⁾が親子関係をはじめとする対人関係や生活の価値観と深く結びついていくと指摘している。即ち、どう生きていこうとするかはその人が家庭生活、社会生活においてどのような価値観をもって行動するかということと密接に関連するといえる。また、生命尊重の点では、上田¹⁴⁾が「子供たちに必要な避妊教育とは、本来、生命の尊さと温もりを正確に伝達することである」と述べたように妊娠・避妊教育の領域のなかで命の尊さについて組み込まれる必要があるのではないかと考える。

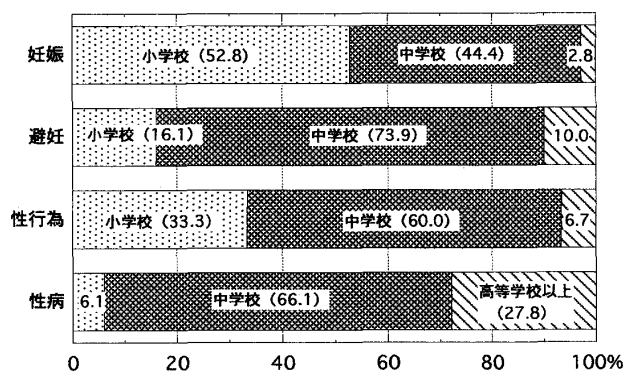


図8 性知識を取得した時期

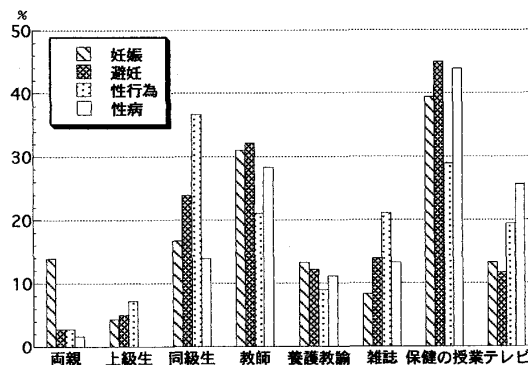


図9 性知識の情報源

(2) いつ、誰から性知識を得たか

性教育の項目の中から、〈妊娠〉、〈避妊〉、〈性交〉、〈性病〉の4項目を取り上げ、それらの知識をいつ得たかを「小学時代」、「中学時代」、「高校以上」に分け、調査した結果、各項目とも大半のものが小、中学校までに知識を得ていることがわかった。〈妊娠〉については小学時代までに知識を得た者が95名(52.8%)で最も多く、〈避妊〉、〈性交〉、〈性病〉については「中学時代」と答えたものが高率であった(図8)。

学校教育においては思春期までに知識として与えられているようであるが、全国的な青少年の性意識調査では、8割以上の者が、「妊娠・出産」、「性病」、「性交」等の性知識はもっているが、69%が自分の知識は不十分だと思っているとの結果¹⁵⁾が示されており、こうした実態を踏まえて指導内容や方法等を検討していく必要があると考える。

次に、性知識を誰から得たかについて、〈妊娠〉、〈避妊〉、〈性交〉、〈性病〉の内容別にみると、図9に示すとおりである。最も高い値を示したものにおいて、〈妊娠〉は「保健の授業」(以下保健とする)71名(39.4%)、〈避妊〉は「保健」81名(45.0%)、〈性交〉は「同級生」66名(36.7%)、〈性病〉は「保健」79名(43.9%)であった。今回の結果では、〈妊娠〉、〈避妊〉、〈性病〉については、「保健の授業」で取り扱われることが多く、〈性交〉に関しては身近な存在である「同級生」より情報を求める傾向がみられる。このことは、小学校や中学校では指導要領において心身の発育・発達および性成熟に伴う行動選択への指導・援助などの内容が取り扱われるようになっていくことと関係していると思われる¹⁶⁾。

一方、最も少なかったのは〈妊娠〉は「上級生」8名(4.4%)、〈避妊〉は「両親」5名(2.8%)、〈性交〉は「両親」5名(2.8%)、〈性病〉は「両親」3名(1.7%)であった。「両親」が低かったという結果は、前述したことに加えて、思春期の子をもつ親の世代は純潔教育を受けてきたという背景があり、性教育に対して回避的であることが要因ではないかと考える。

(3) 性教育が行われる場

「性教育はどのような場で行われるのが適切か」について内容別にみると、「生命尊重・生き方」、「避妊」、「受精・妊娠・出産」は「家庭と学校」という答えが多かった。「エイズなどの性病」(以下「エイズ」とする)は、「学校」、「家庭と学校」と答えた者はほぼ同率であり、高値を示している。「身体の清潔」は、「家庭」が比較的高かった。「男女交際」は、「家庭と学校」であった

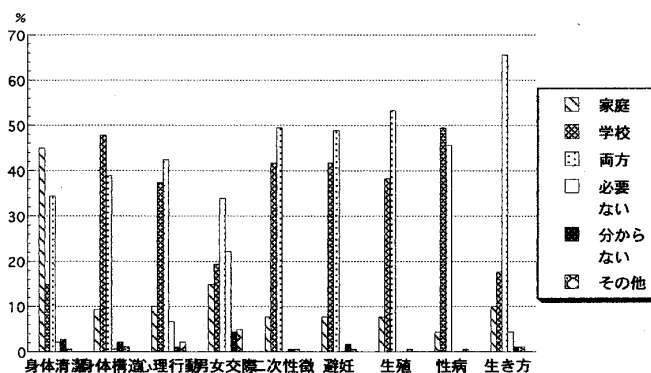


図 10 性教育をする適切な場所

が、他の項目に比べ「必要ない」40名(22.2%)と答えた者の比率が高くなっている(図10)。

性教育の場として、学校だけに限らず学校と家庭で行われることが適切であるという意見が多かった。このことは、学生が学校では基本的な性知識を学び、家庭では自分の個性に即した性教育を望んでいると思われる。しかし、前述した性意識に対して家庭からの影響は少ないと答えた者が多いことから、今まで家庭での性教育はあまり受けていないことが示唆される。性教育は人間のライフサイクル全般にわたる生涯教育といわれ、家庭生活を通じて学んでいくことと発達段階に応じた学校での教育が必要であるといえよう。

「男女交際」について「必要ない」と答えた理由として、「経験や友達の話から身につけていく」、「実際につきあっていきながら身につけていく」が挙げられており、基本的な知識より経験を重視するという一面がみられる。「男女交際」について学校教育では触れる場面が少ないが、「男女が相互に相手の人格を尊重する人間関係のなかで、創造的に生活できる成熟した人間を形成する¹⁷⁾」ためには心理・社会的側面やパーソナリティ等のより広い観点を包括した教育を提供していく必要があると考える。

IV. 結 論

本研究は、性教育のあり方を検討するために、大学生を対象とし、性意識と過去に享受した性教育について調査を行い、以下のような結果が得られた。

1. 人間にとって性とは「本能」とであると答えた者が58名(32.2%)で最も多く、特に男子が高率であった。
2. 性行為とは「愛」とであると答えた者が一番多く、女子が高率であった。「快楽」「生きる証」「寂しさ・孤独感を紛らわすもの」と答えた者は女子より男子が多かった。
3. 婚前交渉については8割以上の者が自分自身・結婚相手に対して処女・童貞へのこだわりは少なかった。
4. 避妊の主体は全体でみると「男女両方」と答えた者が多く、特に女子は9割の者がそれと答えていた。また、「男性主体」と答えた者は女子より男子に多くみられ、男子の4割がそれと答えていた。
5. 「もし自分があるいは相手の女性が妊娠したらどう対処するか」との問いに対して、ほぼ半数が「わからない」と答えており、「産む」とした者が女子より男子に多く、「中絶する」と答え

た者は男子より女子が多かった。

6. 自分の性に関する考え方について家庭の影響を「ほとんど受けていない」と「全く受けていない」と答えた者は45.0%と多く、男女差はみられなかった。
7. これまでに受けた性教育の中で、教育を受けたとする者の半数以上が「役に立った」と答えた項目として「第二性徴」、「避妊」、「受精・妊娠・出産」、「エイズなどの性病について」、「男女の体の働きと構造」があった。性教育を「受けていない」とする者の半数以上が答えた項目として、「身体の清潔」、「生命尊重・人間の生き方」、「男女交際」があった。
8. 性教育が行われる場については、全体的に「家庭と学校」が適切であると考えた者が多かった。なかでも「身体の清潔」については「家庭」が適切であると答えた者が他の項目に比べて多かった。「エイズなどの性病について」は「学校」、「家庭と学校」が適切と答えた者がほぼ同率であり、高値を示していた。「男女交際」については他の項目に比べ「必要ない」と答えた者が多かった。

謝辞：本研究にあたり、ご協力下さいました対象者の皆様に心より感謝致します。

V. 引用文献

- 1) 依田新：現代青年の性意識，p.10，金子書房，1973
- 2) 日本性教育協会編：青少年の性行動，p.7，現代性教育研究，2，1982
- 3) 島崎継雄：青少年の性行動を再考する，p.1，現代性教育研究月報，Vol.7，No.2，1989
- 4) 東京都幼・小・中・高性教育研究会，性意識・性行動調査研究委員会：児童・生徒の性意識・性行動—最新12年の推移—，p.1，現代性教育研究月報，Vol.11，No.10，1993
- 5) 宮原忍ら：若年者の性についての意識と行動に関する研究，p.63，日本子ども家庭総合研究所紀要，第34集，1997。
- 6) 早坂泰次郎編集：系統看護学講座 精神保健—第17章 人間の生徒健康，医学書院，1996
- 7) 高石昌弘：ライフサイクルからみた性，p.351，学校保健研究，Vol.23，No.8，1981
- 8) 松本清一：マスコミの性情報と性教育，p.505，学校保健研究，Vol.26，No.11，1984
- 9) 佐藤憲治・山本直英・村瀬幸治編集：人間と性の教育，あゆみ出版，p.141-144，1998
- 10) 宮原忍ら：若年者の性についての意識と行動に関する研究，p.65，日本子ども家庭総合研究所紀要，第34集，1997
- 11) 新立義文：性教育の指導に関する研究—高校生期の性意識と性行動からみた性教育の内容の検討—，p.5，熊本学園大学論集『総合科学』，1996
- 12) 数見隆生：「性の学力形成」と養護教諭の役割，p.23，健康教室，1993
- 13) 林謙治：性意識形成の背景，p.259，学校保健研究，Vol.32，No.6，1990
- 14) 上田基：生命の尊さと温もりを伝える避妊教育を，p.19-24，健康な子ども，No.291，1997
- 15) 宮原忍：若年者の性についての意識と行動に関する研究，p.62，日本子ども家庭総合研究所紀要，第34集，1997
- 16) 新立義文：性教育の指導に関する研究—高校生期の性意識と性行動からみた性教育の内容の検討—p.1，熊本学園大学論集『総合科学』，1996
- 17) 朝山新一：世界の性学と性教育の動向 人の心と性科学II，星和書店，1978